平泉落日

小野寺公二

さんいちぶっくす

平泉落日

定価　三六〇円

一九六八年七月一日　第一版発行

著　者　© 小野寺　公二　一九六八年
発行者　竹村　一
発行所　株式会社　三一書房
東京都千代田区神田駿河台二の九
電話東京(二九一)三一三一～五番
郵便番号一〇一
振替東京八四一六〇番
印刷所　文栄印刷株式会社
製本所　本間製本株式会社
落丁・乱丁本はおとりかえいたします

小野寺（おのでら）　公二（こうじ）

一九二〇年　青森県に生まれる
一九三七年　岩手県立一関中学卒業
一九四六年　中央大学経済学部卒業
以来、小説・評論・歌詞等の執筆に専念
現住所　岩手県胆沢郡胆沢町南都田字石行

さんいちぶっくす

平泉落日

小野寺　公二

三一書房

梅本アキラ 画

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

一

中尊寺月見坂で催された観月の宴の翌晩、由利維平は故国を棄てた。

屈辱は骨身にしみ透り、眼の中が真ッ赤に燃えるような怒りは、もはや一日も故国にとどまることを許さなかった。

行く先きは、京ではない。鎌倉である。鎌倉には、日置ノ六郎という侍がいる。これは亡母の遠縁にあたる者で、先年、平泉を見物に来てしばらく逗留したとき、親しくした。頼朝幕下でも有力な梶原一族に従っている。

――日置ノ六郎を頼れば、鎌倉軍に投じて、平泉に弓を引くことが出来る――。

この思いつきが、維平を陰惨な喜びに駆りたてた。

夜半に邸を出た。家従の者たちには、地図の仕事で二、三日、旅をすると言い置いた。まだ妻を持たぬ身の気易さに、供もつれずに気まぐれに出歩くのは常のことなので、家来たちは怪しまなかった。

太刀と路銀のほかに、自分が預っていた重要書類はすべて持った。主に地図の類いである。いま総軍司をしている由利宗家の当主八郎友重に命ぜられて作成した地図が、補筆の必要から、まだ多量に手元に残してあった。主な陣地や、その地域で徴達出来る兵員数、馬匹の頭数、物資の種類と数量などを記入したものもある。

御館秀衡や、八郎小父の恩顧に背くこと、そのことだけには多少のうしろめたさをおぼえる。だが、この人たちへの情誼も奇妙に屈折して、いまはかえって、かれらを裏切ることへの小気味よさに変質している。——一人は平泉の統治者であり、一人は平泉軍の総帥であるならば、平泉への遺恨は、かれらもまた報われねばならないのだ。

平泉の奴らが吠え面かくのを思い浮べるのは、身ぶるいの出るような嬉しさであった。おれが鎌倉へ持って行くこの資料が、そして、平泉に関するおれの知識が、鎌倉軍の奥羽征伐に、どれほど役立つことか。——平泉は激しく抵抗するだろう。しかし、やがてはひっくり返るに違いない。平泉滅亡の日は、きっと来る。いや、おれが来させるのだ。

昨夜の醜態は、もとより衣絵もきいたにちがいない。それを思うと、また頭をかきむしって叫び出したくなる。——だが、そのことは、衣絵に対する未練を断ち切る力にもなった。

もう、衣絵に対する未練はないのだ。

自分で自分にそう宣言した。事情が事情とはいえ、まわりの命ずるままにあちらへこちらへと流される従順さが腹立たしかった。衣絵にとってそれがどうにもならないことであるのは、十分

わかっているのに——。

夜が明けそめるころからは、本道をさけた。知り人に会うおそれがあった。やがてこのあたりは、平泉へ出入りする人馬や朝市へ向う車で雑踏してくる。この陸羽街道は、人口十九万の都、平泉を養う最も大きな動脈なのである。

鷹ノ巣の峠にさしかかるころ、冷えびえと夜が明けて来た。

露霜の降りた峠道に立って、いま来た方をふりかえると、昧爽の静けさのなかに、懐しい山河が、うっすらとかすんでいる。

衣絵のいる館は、おおよそあのあたりか……。鶴太郎兼政の腕の中で、衣絵はまだ眠っているかもしれない……。

維平は、再び故郷に背を向けた。

ここまで勢いこんで歩いて来たのに、かれは、今になって妙に気持が萎えて行くのをおぼえた。伴ノ藤八に投げとばされた時の痛みが、まだ首すじから右肩にかけて残っている。左手でそれをさすりながら、維平は歩き出した。何ものかに強いられるように……。

二

維平の出奔の直接の動機は、酒の上の諍いで屈辱を受けたことにあった。だが、この諍いのもとになったものは、権力によって女を奪われたことへの遺恨であり、これがかれに出奔を決意させた根本の原因であった。

月見の宴は、ようやく乱れて来た。

御館秀衡は、背すじの痛む持病をいたわって、もう、とうに伽羅ノ御所へ還られている。

自分でも、悪く酔って行くのを感じながら、由利維平は、また捨てばちのように酒の椀を口に運んだ。酔いにつれて、益々、心がいらだって行く。

――おのれ。どうするか、見ておれ！

宙を睨みながら、またしても、胸のうちに罵りをくり返す。そして深い吐息をつく。

心の中で、いくら罵ったとて詮ないことなのだが、もう、それが癖のようになっているのであ

る。
「維平のぬし――」
左隣に坐っている迫ノ四郎が、もたれかかるようにして顔を寄せ、
「山上ノ薄酒、飲ムニ堪エズ。君ニ勧ム、且ツ吸エ杯中ノ月……」
と言って盃をおしつけて来た。黙って受けると、
「のう、維平。明月を謳うた古今の詩のうちでは、王建の一篇を白眉と推したいが、どうじゃ」
維平の悩みを知ってか知らでか、
「中庭、地、白クシテ、樹、鴉ヲ棲マシメ。冷露、声無クシテ桂花ヲ湿ス……」
と、雅びな声で吟じはじめる。
その横顔を、維平はうるさそうに尻目に見た。詩の賞玩などについて行ける気分ではない。
四郎は、相手の気持におかまいなく、
「……今夜、月明、人尽ク望ム。知ラズ、秋思、誰ガ家ニカ在ラン……」
――知ラズ、秋思、誰ガ家ニカ……?――この男は、おれにあてつけているのか。
吃ッとなって相手を見なおしたとき、すぐ前に腕枕をして横になっていた伴ノ藤八が、桟敷をきしませて起きなおった。
「唐びとの寝言など、ききとうない。それより、今様の戯れ唄をやれ。四郎」
藤八友員は、したたかに酔っていた。奥羽ずい一ときこえるほどの剛力も、酒にはあんがい弱

いのである。しかも、酔えば人にからみたくなる。四郎は黙ってしまった。
この無礼な酔漢は、泰衡の郎従なのだ。それと考えただけでも維平は胸が灼けるようである。
「おい、維平」
藤八は維平の気持を察知したように、向きなおってあぐらをかくと、今度は維平の肩をつかんだ。
「文弱のやからの中でも、わぬしはまた別だ。多少は骨がある。わしは、わぬしが好きじゃ。おい、維平。なんとか返事をせぬか。おお、そうじゃ。恋歌を詠めてみい。恋歌を」
つかんだ肩を荒っぽくゆする拍子に、維平の手の酒がこぼれて直垂をぬらした。
恋歌とは、あのことへの当てつけに違いない。維平は額に青すじを浮べたが、辛うじてこらえた。
「やい。衣絵どのと、やりとりした歌があるじゃろう。それを詠めてみいというのじゃ」
維平は、怒りで血の気を失った。いつまでもふさがろうとせぬ心の傷を、毛むくじゃらの太い指でかきまわすような藤八の言葉である。藤八ずれに侮辱されるすじ合いはない。
返す言葉も出ないほど激昂して、分別を失った維平は、傍の太刀をとると足金のあたりを握って、鞘のまま藤八の横鬢のあたりを力まかせに撲りつけた。
「うッ」
と呻いて横面をおさえた藤八は、維平のあまり激しい怒りように一瞬、気をのまれたようであ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

ったが、見る見る酒がさめて行くらしかった。撲られたはずみに烏帽子がうしろへスッ飛んで緒が首にひっかかっている。

「維平。立て！　もののふの面体を打擲して、よも、このまま済まそうとは思うまい」

まわりで酔いさざめいていたやからが、いつのまにか、ひそとなって、いっせいにこちらに注目していた。維平の心を、かすかな後悔がよぎった。

立上った藤八は、上から見おろしながら、

「地面へおりて、相撲で雌雄を決しよう。参れ、維平！」

中尊寺の山下のゆるやかな斜面に、桟敷の段々をしつらえて、そこが月見の野宴の席であった。したがって、板敷の席でそのまま相撲を争うことは出来ない。

維平は、もう、どうにでもなれという気であった。

藤八にしたがって桟敷を下りて行くと、侍たちは、

「誰と誰が相撲うと？　相撲でうたげの興を添えるとか」

などと口々に騒ぎながら、ぞろぞろとあとについておりて来た。——冴えた月光が、あたりを照し出している。

藤八が大股で歩くと、実際に地響きがするようである。維平とて文弱というほどの男ではないが、奥羽ずい一の藤八に相撲して勝てるはずはなかった。しかし、そのような勘定をしている余裕などないのである。これまで、何かに叩きつけねばすまされぬように鬱積していた怒りが、た

またま藤八によって激発されたということなのであった。
その怒りは、みたち秀衡の家嫡泰衡に対する遺恨であり、ひいてはみたち一門の権勢につらなる者どもへの憎悪であった。
藤八が名をあげて揶揄した衣絵姫と、維平が知り合ったのは、この年の夏のことであった。

陰暦五月の末、維平は、公用で、名取郡一帯の軍用資源調査の旅に出ていた。
帰途、北上川沿いの道をとることにして、沿岸の小松という村に宿をとったとき、ちょうどそこに、乙部左衛門尉父娘の一行が泊っていた。小さな村駅のこととて、中央の貴顕や侍の泊れる宿はひとつしかなかった。左衛門尉則康は、平泉の政庁で貿易を管掌しているので、牡鹿湊(石ノ巻港)へ視察に来た帰りであった。このたびは遊山がてらに父と同行した姫たちをつれているので、日をかけてゆっくり平泉へ戻るつもりとのことであった。維平も、平泉まで同道することを約束した。
宿をとった翌日は、雨であった。出立を一日のばし、つれづれのままに、歌会がはじまった。
則康は、平泉でも上流の家柄で、先祖も、藤原の北家に出自する公家であるときいている。姫たちは、家柄にふさわしい気品はあったが、まだ若いため、藹たけたというよりも愛らしい感じであった。姉姫は衣絵といって十五、六ぐらいか、妹姫は十一、二歳で茜といった。維平は、昨晩紹介をうけたときから、もう衣絵の魅力のとりこになっていた。

熱っぽい目で姫を見る維平の様子と、何か笑いが起ったり座がざわめいたりするたびに、姫の方もまたチラと維平の方を見るのを、歌の講師をつとめていた乙部の家来、色麻ノ平七が、鋭く観察していた。

明日、晴れたならば、一緒に出発しようということになっていた。午の刻すぎ、雨があがったので、維平は、このあたりの地形を見たいと思い、ひとりで出かけた。このたびの出張は測量の用もないので、家来をつれて来ていなかった。もともと単身で歩くのが好きなのである。

その留守の間に、乙部の一行は、船でにわかに出発してしまった。ちょうど、平泉へのぼる交易船の便があった。牛車で諸所に泊りながら帰る計画を、急に変更したのである。

色麻の提案であった。

平泉の家臣団は、みたち秀衡の子息たちも加えて、いくつもの派閥に分れている。乙部則康は、事情あって最近、新しく泰衡（みたちの嫡子）派に加わった（正しく言えば弱みを握られたことによって強制的に同派に引入れられた）ものである。したがって、対立する忠衡（みたちの三男）派の由利一門の者と親しくすることは憚りがある。同道するところを他人に見られても迷惑となろう。色麻がそのように主張するので、則康もそれを入れて、維平のいない間のにわかな出立となったのである。

平泉の家臣の間の派閥は、みたちの重みによって抗争にまでは至らなかったが、かねてから鋭い対立を続けている。色麻は、泰衡派の中心である河田直仲の縁故の者で、言わばお目付役のよ

うな形で、新しく乙部家に送り込まれて来た者であった。
忠衡派は、熱烈な平泉至上主義を捧ずる者たちの集りであるが、なかには比較的穏健な者もいる。由利八郎友重も穏健派であったから、その一族の者をつれて歩いたぐらいで、どうということもあるまいと思われたが、泰衡と河田に弱点を握られている乙部としては、色麻の提言には何事によらず従わねばならなかった。
正室を亡くしていた色麻ノ平七は、衣絵を妻に申し受けたいと思っていた。しかし、衣絵はこの陰気な中年男を極端に嫌っていた。わが家に対するかれの立場を嫌悪していることは言うまでもない。したがって、衣絵が心を動かす相手の男に対して、色麻が憎しみの炎を燃やすのは道理であった。
維平は、次の停留地、西桃生(もものう)から乗船する、と色麻は姫たちに告げた。乙部と打合わせてのことである。衣絵はそれを信じた。
維平に対しては、宿のあるじに言伝して、衣絵姫が早く帰りたい、陸路は厭だと申されるから、と言い置いた。
夕刻、宿へ戻って来た維平は、ひどく落胆した。落胆しながら、どこか腑に落ちない気がした。姫とは、心の通いが出来たように思っていた矢先き、姫の意志によるというにわかの別れなのである。

今朝早く、手水を使ってから部屋へ戻る途中、衣絵に会った。衣絵は廊下に立って、外の雨を眺めていた。どこか愁わしげなその様子に、維平は心を惹かれた。自分も立ちどまって外を見ながら、

「このあたりは、はじめてでございますか」

と話しかけると、

「はい、はじめてでございます。——でも、宮城野へは、いちど、高館の朝臣さまのお伴で、萩の花見に参りました」

にっこり頬笑んで応えるロもとに、かすかなえくぼが生まれた。今までの愁いの色が、ぱっと明るいしとやかさに変る。——維平は嘆息したいようであった。

高館の朝臣というのは、藤原ノ基成である。話をきくと、姫はこの人に和歌を習っているという。歌は維平も好きな道である。おのずと話が合い、気持がほぐれて行った。

茜姫が二人を見つけて走り寄って来て、しきりに姉にまつわりついた。衣絵はその肩を手でおさえながら、少し眉をひそめて維平に頬笑んでみせた。そのしぐさも姉らしく優しかった。

まもなく、老僕が追って来て、茜をあやしながら連れ去った。二人の語らいをじゃまさせまいという好意のように思えて、快よかった。

朝食のあとの歌合わせには、村の名にちなんで、松という席題が出た。

衣絵の歌は、

十返(とかえ)りの花は見ずともよしゑやし
若芽のみどりしばし保たば

というものであった。歌もまた、その横顔のように、どこか愁いを秘めていた。

維平は、自分が、姫にすっかり心を奪われているのを自覚した。

維平の歌は、こうであった。

永き日を原の小松に曳く影の
いや長きまで遊びくらさむ

姫を知ったことの幸福感が、ひとりでに歌にあらわれていた。

――あれから数刻しか経っていない。それなのに、衣絵はもうこの宿にいないのである。

これから先きの旅の楽しみを、今朝あのように語り合っていたのに、なぜにわかに発ってしまったのか。宿のあるじの言葉通りとは思えない。理由がわからぬままに、いらだたしい寂寥が、夕闇とともに身を包んでくる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo